

令和3年度特色入試問題

《教育学部》

資料集

資料一覽

資料 1

(出典) James B. Reichmann, *Philosophy of the Human Person*, Loyola University Press, 1985, pp. 151-152.

資料 2

(出典) 福田節也・余田翔平・茂木良平「日本における学歴同類婚の趨勢——1980年から2010年国勢調査個票データを用いた分析」『IPSS Working Paper Series (J)』14, 2017年, p. 18.

資料 3

(出典) Sendhil Mullainathan and Eldar Shafir, *Scarcity: The True Cost of Not Having Enough*, Penguin Books, 2014, pp. 69-70.

資料 4

(出典) 伊藤秀樹「『計画された偶然』による進路選択——高等専修学校を事例に」『日本教育社会学会大会発表要旨集録』65, 2013年, pp. 312-313.

資料 5

(出典) 下條信輔『サブリミナル・マインド——潜在的人間観のゆくえ』中央公論社, 1996年, pp. 221-224 (図は p. 206) .

資料 6

(出典) ユヴァル・ノア・ハラリ (柴田裕之訳) 『21 Lessons——21世紀の人類のための21の思考』河出書房新社, 2019年, pp. 81-84.

資料 7

(出典) 久留島浩「歴史系博物館の可能性」岩城卓二・高木博志編『博物館と文化財の危機』人文書院, 2020年, pp. 56-60.

教育学部資料集は、資料2、4、5、6、7のみ公開する。

資料 2

(出典) 福田節也・余田翔平・茂木良平「日本における学歴同類婚の趨勢——1980年から2010年国勢調査個票データを用いた分析」『IPSS Working Paper Series (J)』14, 2017年, p. 18.

1980

N= 8,636,518

wife \ husband	JHS	HS	JC/VS	UNI	Total
JHS	21.1	8.0	0.3	0.5	29.9
HS	8.6	35.9	1.9	9.9	56.3
JC/VS	0.4	2.4	0.8	5.7	9.3
UNI	0.0	0.3	0.1	3.9	4.4
Total	30.2	46.7	3.1	20.0	100.0

1990

N= 6,785,605

wife \ husband	JHS	HS	JC/VS	UNI	Total
JHS	6.4	3.6	0.2	0.3	10.5
HS	7.0	36.8	2.8	10.5	57.1
JC/VS	0.9	7.0	2.4	12.1	22.4
UNI	0.1	0.9	0.3	8.8	10.1
Total	14.4	48.3	5.7	31.6	100.0

2000

N= 5,712,160

wife \ husband	JHS	HS	JC/VS	UNI	Total
JHS	1.6	2.0	0.2	0.3	4.1
HS	3.9	33.3	4.0	10.6	51.8
JC/VS	0.8	9.5	4.8	16.2	31.4
UNI	0.1	1.3	0.6	10.7	12.7
Total	6.4	46.1	9.6	37.9	100.0

2010

N= 4,815,036

wife \ husband	JHS	HS	JC/VS	UNI	Total
JHS	1.0	1.5	0.2	0.3	3.0
HS	2.8	23.6	4.4	7.5	38.2
JC/VS	1.1	12.2	8.1	16.4	37.9
UNI	0.2	2.8	1.8	16.1	20.9
Total	5.0	40.1	14.6	40.2	100.0

出題者注：本資料は、ある学術論文に掲載されている表である。社会学では、結婚相手に自分と同じ学歴を選ぶ場合（学歴同類婚という）が多いこと、女性は自分と比べて学歴の低い相手との結婚（学歴下方婚という）よりも、学歴の高い相手との結婚（学歴上方婚という）を選びやすいことなどが知られているが、この論文はその種の結婚行動がテーマである。

表は、1980年、1990年、2000年、2010年の国勢調査の回答から「妻が30代である夫婦」のみを抽出して作成されたデータを集計したものである。JHS等の文字は最終学歴（最終卒業学校）を示しており、JHSは中学校卒、HSは高等学校卒、JC/VSは短期大学・高等専門学校・専門学校卒、UNIは大学卒という意味である。

表中の数値は、それぞれの年のすべての夫婦を100%としたとき、夫婦の最終学歴の組み合わせがどのようになっていたのかを示している。たとえば1990年には、「妻が30代である夫婦」は全部で6,785,605組いたが、これを100%としたとき、妻が大学卒であった夫婦は10.1%を占めていた。同様に、夫婦ともに大学卒であった夫婦は8.8%であった。また、2000年の「妻が大学卒の夫婦」の中に占める「夫も大学卒である夫婦」の割合は、 $10.7 \div 12.7 \times 100 = 84.3\%$ と計算できる。

小数第二位で四捨五入しているため、縦または横の合計がTotalの値と一致しない場合がある。「0.0」は0.05未満という意味である。

資料 4

(出典) 伊藤秀樹「『計画された偶然』による進路選択——高等専修学校を事例に」
『日本教育社会学会大会発表要旨集録』65, 2013年, pp. 312-313.

ただし、出題にあたり、文章に一部変更を加えている。

1. 問題の所在

本報告の目的は、全日制高校ではない後期中等教育の学校・教育施設において、生徒がフリーター・無業を選択せずに卒業していくような学校の環境設計のあり方を、生徒の進路展望の形成過程に着目しながら描き出すことにある。

日本の後期中等教育には、主流である全日制高校以外に、定時制高校、通信制高校、高等専修学校、サポート校などの学校・教育施設（以下、非主流の後期中等教育機関）がある。これらの学校・教育施設は、学業不振や不登校などの理由で全日制高校に進学できなかった中学校卒業者の重要な受け皿となってきた。しかし、学校基本調査によると、定時制高校・通信制高校では卒業後に約3割の生徒が進路未決定のまま（フリーター・無業として）卒業している状態にある。

ただし、非主流の後期中等教育機関の内部でも、生徒の進路決定率には学校・教育施設間で大きな差異がある。たとえば、報告者がフィールドワークを継続してきた高等専修学校（以下、Y校）では、定時制高校・通信制高校とほぼ同様の生徒層を受け入れているが、卒業生のほとんどが進学あるいは正規雇用での就職という形で進路を決定して卒業している。本報告では、Y校の生徒たちの進路決定がいかなる学校側の環境設計によって支えられているのかについて、生徒が語る進路展望の形成過程に基づきながら明らかにしていく。

その際、具体的に注目したいのは、Y校の生徒たちにおける「やりたいこと」（きつきたい職業）と進路決定との関係性である。

先行研究では、「やりたいこと」志向は、若者たちをフリーター・無業へと水路づけるものだと考えられてきた（久木元 2003; 千葉・大多和 2007; 岩田 2010 など）。しかし同時に、生徒の「やりたいこと」の尊重を、学校の進路指導の基盤から外すことはできないという（千葉・大多和 2007）。

酒井編（2007）では、「生徒の希望・自己選択」を重視しながら、生徒の将来に配慮して堅実な進路を「自主的に」選択させるための、用意周到な環境設計が重要であると提起している。ただしこれまでの研究では、生徒たちの進路展望、さらには「やりたいこと」がどのように形成されているかという点が十分に把握されてこなかったため、具体的な環境設定のあり方を示すには至らなかった。

本報告で示したいのは、非主流の後期中等教育機関において、生徒が思い描く「やりたいこと」の尊重と進路決定を、学校の環境設計によって両立させるメカニズムである。本報告ではそうした環境設計を、近年注目を集めているキャリア理論である Mitchell, Levin & Krumboltz (1999) の「計画された偶発性」理論 (Planned Happenstance Theory) を補助線としながら描き出していく。

2. 「計画された偶発性」理論

「計画された偶発性」理論は、人々のキャリアには予期せぬ偶然の出来事が重要な役割を果たすことを強調するものである。この理論によると、偶然の出来事はキャリアに関する新しい興味を生み出したり、新たな学習の機会を提供するものである。そのため、キャリア形成に向けて、偶然の出来事を受け入れ／生み出すための準備をしておくことが重要だとされる。より具体的には、当人が将来に対してオープンマインドで臨み、①好奇心、②忍耐力、③柔軟性、④楽天主義、⑤リスクテイキングといった心構えをもつことが必要だと主張されている。

この理論から導かれる仮説は、以下の2点である。第一に、(客観的には必然的な事象かもしれないが) 当人には予測できなかった出来事が、生徒たちの「やりたいこと」や進路選択に影響を与えるのではないかということである。第二に、Mitchell, Levin & Krumboltz (1999) では当人の心構えによっ

て出来事を「計画」的に起こすことができると主張されているが、生徒の心構えだけでなく学校側の環境設計によっても出来事を「計画」できるのではないかということである。

3. 事例と方法

事例とする Y 校は、首都圏に位置する私立の高等専修学校であり、全日制高校とほぼ同様の形で昼間に授業を行う、3 年制の共学校である。Y 校では、普通教科と専門教科の授業がおよそ 5:5 の割合で開講されており、情報・絵画・体育・調理など計 7 つの専門コースが設けられている。Y 校は大学入学資格付与指定校に認定されており、卒業後の進路については、大学・短大・専門学校への進学や高卒者と同等扱いでの就職が可能になる。

Y 校では自閉症の生徒が全体の 6 割を占めるが、4 割程度は障害のない生徒（「健常の生徒」）である。健常の生徒については、他の非主流の後期中等教育機関と同様、不登校・高校中退・学業不振などの理由から全日制高校に進学できなかった生徒が多い。そうしたなかで、Y 校の健常の生徒の進路内訳は、ここ 5 年間では進学者 77.1%、就職者 21.3%、その他 1.5%であった。専門コースに関連した進路を選ぶ生徒は少なく、むしろ福祉系・保育系の進路を選ぶ生徒が多いのが、例年の特徴である。

分析では、2005 年 10 月～2011 年 7 月にかけて健常の生徒 29 名・卒業生 4 名に実施したインタビューから、進路選択に関する語りを抽出した。その過程で、①出来事とそれに対する意味づけの連鎖のもとで生徒たちの「やりたいこと」が見出されていること、②その出来事は学校の環境設計と関連をもつものであること、の 2 点が浮かび上がった。

4. 2 つの環境設計——「やりたいこと」の創出と制御

インタビューを行った生徒の大多数は、入学後に「やりたいこと」が定まり、それに基づいた進路選択を行っていた。そして、その「やりたいこと」は、学校内/学校外の出来事とそれに対する意味づけの連鎖から導き出されていた（「出来事ベースの進路選択」）。

進路選択に影響を与えた学校内の出来事と

しては、インターンシップやホームヘルパー 2 級講座、保育ボランティアなどの実習体験、専門コースの授業、部活動、学校でのリーダー体験、自閉症の生徒とのかかわりなどが挙げられている。そうした学校内での多彩な経験は、専門コースにもとづく進路展望が描きにくい生徒にとっても、「やりたいこと」を見出し進路選択に積極的になる確率を高めるものだと思定できる。

また、学校内の出来事のうち、部活動やリーダー体験、自閉症の生徒とのかかわりなどは、生徒たちにとっては進路展望に基づいて主体的に行った出来事ではなく、進路選択の面では予期せぬ「偶然の出来事」であった。Y 校の実践からは、こうした「偶然の出来事」の機会を計画的に設けることで生徒に「やりたいこと」を創出するという、学校の環境設計が可能であることが示唆される。

一方で、Y 校の生徒たちは、学校によって「やりたいこと」の制御という影響も受けていた。生徒たちからは、進路選択に影響を与えたさまざまな学校内の出来事が語られる一方で、学校外の出来事については、家庭にまつわる出来事と、過去の不登校経験という 2 つのパターンのみしか語られなかった。

荻谷ほか（2003）では、進路多様校では学校外文化への接触が生徒の進路意識を幅広く規定することを指摘している。しかし Y 校の生徒たちからは、学校外の仲間関係、アルバイトの経験、または消費文化の影響などが進路選択に影響した様子は語られなかった。

Y 校の生徒たちは、学校への適応と部活動への熱中、アルバイトの原則禁止、学校外の友人の少なさなどによって、学校外の世界と接する機会を失っている傾向にある。そうしたなかで生徒たちは、フリーターの実情や彼ら/彼女らが抱く「やりたいこと」に直面する「偶然の出来事」をもたないまま、フリーターという将来の選択肢を棄却しているのではないかと推察される。Y 校では、学校内に生徒を巻き込む環境設計によって、生徒たちをフリーター・無業へと水路づけるような「やりたいこと」を思い描かないよう制御していると考えられることができる。

出題者注：文中にある「久木元 2003」「酒井編（2007）」などの表記は、参照文献を示している。それらの書誌情報は、本資料では省略されている。

資料 5

(出典) 下條信輔『サブリミナル・マインド——潜在的人間観のゆくえ』中央公論社, 1996年, pp. 221-224 (図は p. 206) . ただし、出題にあたり、文章に一部変更を加えている。

マインド・コントロールに対して、私が抱く危機感にはふたつの側面があります。そのひとつは、コントロールが微妙であり気づきにくいほど、私たちはますます無抵抗になるという事実です (ボーンシュタインの実験結果を思い出してください)。もうひとつは、サブリミナル・コマーシャリズムによる、欲望の「受動化」「画一化」という側面です。そしてサブリミナルの性質上、私たちはそれら事実気づかないのではないのでしょうか。

コマーシャリズムだけではなく、遊びや芸術や科学技術にまで、このような制御と均一化の傾向が浸透し、さらに政治的な世論操作や思想統制に直接使われるとしたら。そんなことを想像してしまうのは私だけでしょうか。それに、これは単なる想像なのでしょう。

民主主義の前提にあるのは、「自由な選択を許された責任ある個人」の人間像です。しかしこれはあくまでも建前で、コマーシャリズムと宣伝によって無自覚に踊らされ、マスコミを通じたサブリミナル・メッセージによって政治選択をおこなう現代日本人には、成り立たない前提かもしれません。「どうせ投票してもしなくても同じ」と棄権する若者の姿には、マインド・コントロールされた者の無力感さえ漂います。

周囲から制御され得る潜在的認知過程と、自立し意志を持った自覚的な心。この両者がどのように相互作用するのかが、研究者の今後の課題であり、この両者の間をどのように調停し、折り合いをつけていくかということは、現代人すべての問題だと思います。

それにつけても思い出される、印象的な SF 短編があります。バラードの名作「^{しきり}識闕下の人間像」です。バラードは、1963 年発表のこの作品ではやくも、今日の危機を鋭く予測し、警告を発しているかのようです。

消費が極度に加速化された近未来社会。車やテレビやその他家電製品はみな月単位でモデル・チェンジがおこなわれ、消費者はあらゆる手段で買い換えを強要されています。車もたばこも銘柄は種類しか存在せず、しかも人々はそれを競って買い求めています。実はこの近未来社会では、経済全体がインフレ高度成長を続ける以外に破局を防ぐ方法はない、という共通認識のもとに、制御されているのです。国家ぐるみで徹底した広告宣伝によって購買意欲がかきたてられ、消費が促進されているのです。

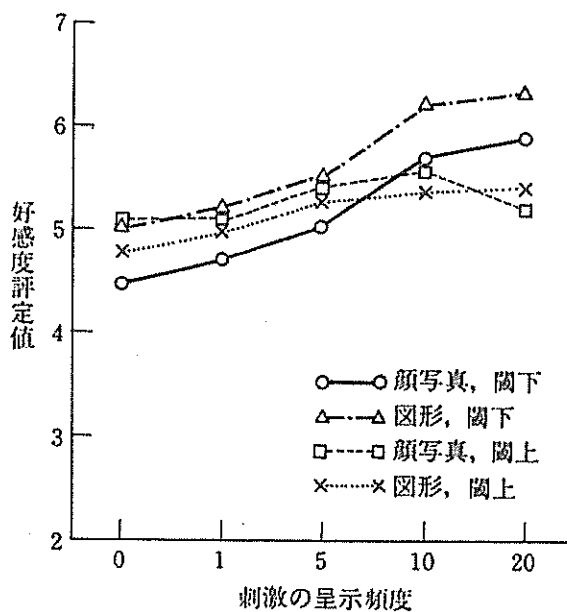
ある日突然、高さ 100 フィート以上の金属性の巨大な標識が、ハイウェイ沿いや街のあちこちに建設されはじめます。その表面は網状の金属コイルに覆われ、変圧器から電気ケーブルがそれらに向かってのびています。車を運転する者から見ると、それは無意味な光点の配

列が点滅しているだけに見えるのです。この標識について、あるいはそこに秘められたサブ
 リミナル（識閾下）のメッセージについて、妙な妄想に取り憑かれ、警告を発しつづける「気
 が変になった」友人。主人公は、まだたばこがポケットにあるのに、つい自動販売機のとこ
 ろに行ってコインを投じてしまいます。自家用車もまだ新しいのに、気がつくとも新しい車
 を買ってしまっています……。

そして暗示的なラストシーン。主人公とその妻は、自分たちの部屋の窓から、新しく建設
 され始めた標識を眺め、近々発売される予定の新車の購入申し込みについて話しています。

二人はきちんと刈り込んだガレージへの道に出た。陽が昇るにつれて、あの大きな標識の
 影も、静かな住宅地帯の上を徐々に移動して行き、スーパー・マーケットへと急ぐ人々の頭
 を、まるで死神の鎌の巨大な暗い刃のようになで切りにしていくのだった。

出題者注：本文3行目の「ポーンシュタインの実験結果」とは、閾上の（「見た」という自覚のある）刺激
 の単純呈示効果と、閾下の（「見た」という自覚のない）刺激の単純呈示効果を比較したものである。下図
 はその実験結果の一部を示したもので、顔写真と図形について、呈示頻度ごとの好感度をプロットしたも
 のである。



資料 6

(出典) ユヴァル・ノア・ハラリ (柴田裕之訳) 『21 Lessons——21 世紀の人類のための 21 の思考』河出書房新社, 2019 年, pp. 81-84.

ただし、出題にあたり、文章に一部変更を加えている。

一部の国や一部の状況では、人々はまったく選択肢を与えられず、ビッグデータアルゴリズムの決定に従うことを強制されかねない。とはいえ、自由社会とされている場所でさえも、アルゴリズムが権限を増すかもしれない。私たちはしだいに多くの事柄でアルゴリズムを信頼したほうがいいことを経験から学び、自ら決定を下す能力を徐々に失っていくだろう。考えてもみてほしい。わずか 20 年のうちに、何十億もの人が的確で信用できる情報を探すという、非常に重要な任務をグーグルの検索アルゴリズムに委ねるようになった。私たちはもう、情報を探さない。代わりに、「ググる (Google で検索する)」。そして、答えを求めてしだいにグーグルに頼るようになるにつれて、自ら情報を探す能力が落ちる。そして今日、「真実」はグーグルでの検索で上位を占める結果によって定義される。

(中略)

毎年^{何億}何億の若者が、大学で何を学ぶか決める必要に迫られる。これはとても重要でとても難しい決定だ。若者たちは、親や友人や教師からのプレッシャーにさらされるが、こうした人々はみな、異なる関心と意見を持っている。若者たちはまた、自分自身の恐れや夢想にも対処しなくてはならない。さらに、ハリウッドの大ヒット作や低俗な小説や高度な広告キャンペーンによって判断が鈍ったり操作されたりしている。賢い決定を下すのはなおさら難しい。なぜなら、それぞれの職業で成功するためには何が必要なのかが本当にわかっていないし、自分の長所や短所を現実的に捉えていないからだ。弁護士として成功するには何が必要か？ 自分はプレッシャーの下で能力を発揮できるか？ 他人とうまく協力するのが得意か？

自分の技能が正確にわかっておらず、弁護士の仕事がどのようなものかについては、なおさら現実離れしたイメージしか持っていないせいで (一日中劇的な弁論を行ったり、「異議あり、裁判長！」と声を張り上げたりしているわけではない)、ロースクールに進学する学生もいるだろう。一方、彼女の友人は、必要とされる骨格も自制心も持たないのに、子供時代の夢を実現することに決め、プロになろうとバレエを学び始める。何年も過ぎてから、二

人は揃って自分の選択を深く後悔する。私たちは将来、そうした決定をグーグルに任せることができるようになるだろう。たとえばグーグルは、ロースクールやバレエスクールに行くのは時間の無駄だが、すばらしい心理学者あるいは配管工にはなれるかもしれない（そしてとても幸せになれるかもしれない）と、私に教えることができるだろう。

キャリアに関してや、ことによると人間関係に関してさえ、AIのほうが私たちよりも優れた判断を下すようになった日には、人間性と人生の概念は変わらざるをえない。人間は、人生は意思決定のドラマだと、当たり前のように考える。自由民主主義と自由市場資本主義は個人を、世の中について絶えず決定を下している自律的な行動主体と見なす。シェイクスピアの戯曲であれ、ジェイン・オースティンの小説であれ、悪趣味なハリウッドのコメディであれ、芸術作品はたいてい、きわめて重大な決定を下さざるをえない主人公を中心に展開する。生きるべきか死ぬべきか？ 妻の言うとおりにしてダンカン王を殺すべきか、それとも自分の良心に耳を傾け、王を殺さずにおくべきか？ コリンズ氏と結婚すべきか、それともダーシー氏と結婚すべきか？ キリスト教とイスラム教の神学も同じように、意思決定のドラマに重きを置き、永遠の救済あるいは断罪は、正しい選択をすることにかかっていると説く。

私たちがしだいにAIに頼り、決定を下してもらうようになると、この人生観に何が起こるのか？ 現時点では、私たちはNetflixを信頼して映画を推薦してもらい、グーグルマップを信頼して右に曲がるか左に曲がるか選んでもらう。だが、何を学ぶべきかや、どこで働くべきかや、誰と結婚すべきかを、いったんAIに決めてもらい始めたら、人間の一生は意思決定のドラマではなくなる。民主的な選挙や自由市場は、ほとんど意味を成さなくなる。大方の宗教と芸術作品にしても同じだ。アンナ・カレーニナがスマートフォンを取り出して、カレーニンの妻であり続けるべきか、それとも颯爽としたヴロンスキー伯爵と駆け落ちするべきかをフェイスブックのアルゴリズムに尋ねるところを想像してほしい。あるいは、あなたが気に入っているシェイクスピアの戯曲で、きわめて重要な決定がすべてグーグルのアルゴリズムによって下されるところを想像するといいい。ハムレットとマクベスははるかに安楽な人生を送れるだろうが、それはいったいどんな種類の人生となるのか？ そのような人生の意味を理解するためのモデルが、私たちにはあるのか？

Excerpt(s) from 21 LESSONS FOR THE 21ST CENTURY by Yuval Noah Harari, copyright (c)2018 by Yuval Noah Harari. Used by permission of Spiegel & Grau, an imprint of Random House, a division of Penguin Random House LLC. All rights reserved.

資料7

(出典) 久留島浩「歴史系博物館の可能性」岩城卓二・高木博志編『博物館と文化財の危機』人文書院, 2020年, pp. 56-60. ただし、出題にあたり、文章に一部変更を加えている。

地球レベルでも世界レベルでも、希望や期待をもって未来を見通すこと自体が容易ではなくなっており、このような時だからこそ、現在（「今」）の視点から、人間の経験・活動の蓄積の結果である歴史を学ぶことの持つ意味は大きいと考える。そして、価値観や歴史認識を異にする人びととの間での具体的な対話や交流を促し、国際的な相互交流を進める必要性も明確になっている。インターネットやソーシャルネットワークの進化によって、多くの新しい知識や情報を得ることができ、国や地域を超えて見ず知らずの人びとと意見を交わすこともできるようになってきたが、その一方で、独りよがり、見たいものしか見ようとせず、耳ざわりの良いものしか聞こうとしないで、フェイクニュースやヘイトニュースを送受信しても疑問をすら持たない、自称「愛国者」たちも増えており、結果的に自国・自民族第一主義を拡散させているのではないかとと思われる。

そのなかで、真摯に歴史と向き合うこと、歴史から真摯に学ぶことが重要で、歴史系博物館には、こうした「内向きの」「一国史」・「一民族史」的歴史観を相対化し、誰もが映像・写真や文献資料を含む「モノ」資料などによる展示で示された歴史や文化を享受できるという役割が大きくなってきているのではないかと考える。

そのなかで、とくに重要なのは、展示しにくい歴史、展示したくない歴史、すなわち「語りたくない負の歴史」（国民に知らせたくない国家的な犯罪など）や「暗い過去」と向き合うこと、そうした「負の歴史」に関わる展示をめぐる意見の異なる人びとと議論することだと考える。

(中略)

ここでは、日本の歴史系博物館（平和博物館も含めて）で「戦争」を展示することの問題点について触れたい。日本の歴史系博物館の現状と、それでも博物館でできること（博物館の可能性）について、論点を少しでも共有できればと考えるからである。

では、現在の日本の歴史系博物館が抱えている課題はどのようなもので、それでも何ができるのか、について二点ほど私見を述べたい。

第一に、前提としておかなければならないのは、「近代的」博物館・美術館は、近代国民国家形成と関わって形成されてきたので、ナショナル・アイデンティティ＝国民の意識（歴史意識）の形成に関わり、とくに歴史的・文化的な「物語」を創る（再発見・再解釈する）ことによって「国民を創る」という役割を担ってきたという、周知のことであり、この点をどのように克服できるか、ということである。その政治性は隠しようもなく、「政治的中立」を博物館に求めることは現実にはきわめてむずかしい。この点は、後述するように、とくに戦争記念館など、国家の戦争の記憶を伝えるところでは顕著である。「自国の兵隊」が「自国」のために経験したことを「自国との関係」を前提として展示することで「記念」し、「記憶」を未来へ、戦争を経験していない世代へと継承することを目的としているがゆえに、それと異なるストーリーはもともと想定されていない。国民国家の国民統合の意思がもっと

もわかりやすいかたちで現れるのである。しかし、もっとも政治に左右されやすい歴史系博物館とはいえ、現在のドイツの歴史博物館の主張に典型的なように、「一面的でナショナルなパースペクティブやメインストリームの視点からは歴史や文化を示すことはできない」というのが、近年、現在までを展示しようとする世界の歴史博物館の潮流である。残念ながら日本の近現代を展示する歴史博物館は、この点では後れを取っており、それ故に、博物館としての政治性や恣意性には留意しつつも、「一国史」にならないように、ジェンダー的視点や少数民族の視点から、しかもグローバルにみることを重視して展示をすれば、その歴史展示の持つ可能性を現代社会において広く共有することができるのではないかと考える。

その意味では、とくに、戦争・公害・災害（人災）や少数民族をめぐる矛盾・対立など、権力にとって、触れたくない（触れられたくない）「負の歴史」や継承したくない「負の記憶」を展示に組み込むことによって、国民に知らせたくない国家的な犯罪など博物館がそれをめぐる論争をどのように提供できるかどうかということが鍵になってくる。

第二に、歴史系博物館の来館者のなかに、しばしば見られる「歴史博物館には正しい歴史の事実（史実）が展示されている」という、意外に根強い言説（思い込み）に対して、いかに対処できるかという点である。もちろん、「確定した過去」、「この点だけは事実だ」ということがないわけではないし、歴史学とは、史料批判を行って、こうした歴史的事実に少しでも近づき、広く共有することを目指した学問である。歴史系博物館の展示は、史料批判を経た資料から過去を読み解いて、それを並べることで、ある歴史像を示すと言う点では歴史学の研究方法と変わりはない。その意味では、実証に裏付けられた展示をすることが大原則ではあるが、膨大な資料の中からほんの僅かの資料を選択して、ある順番に並べる過程で、「切り取った過去」ということになってしまうことは否めない。展示したものだけでは、十分に歴史を可視化することはできない、これも周知のことに属する。写真や映像に写っていることは事実ではないか、とも考えられがちだが、映像を撮った人の目や感性に規定されており、ある方向から切り取った像にすぎないのである。全体ではないのである。ここでも、戦争について言うと、そもそも「事実」とは何かが鋭く問われており、このことは、たとえば大岡昇平が何度も何度も繰り返し、『レイテ戦記』に手を入れ続けざるをえなかったことを想起すれば理解できる。一つの史料、一つの証言で、「事実」が異なってしまう可能性があるのである。さらに、現代の戦争では、攻撃する側が記録し、見せる映像からは、被弾した人びとの「現実」は見えなくなっている。否、映像に映っていないから、というだけではなく、むしろこうした映像は隠される、といったほうがよいかも知れない。この点では、戦争博物館のなかで展示されていないことは何か、ということに注目する必要がある。

実は、戦争に関わる展示をしている歴史系博物館あるいは資料館は、靖国神社境内にある遊就館や、昭和館・しょうけい館（戦傷病者史料館）・平和祈念展示資料館などのほか、空襲の被害を受けたところを中心に、自治体がつくったものだけでも 30 以上存在している。ほとんどのところで、戦争の悲惨さと「平和の意義」が「説かれて」おり、「平和」が「祈念」されている。こうした戦争に関する博物館の多くが、戦争は嫌だ、日本国民は平和を求めている、という国民意識を醸成してきたという点で大きな役割を果たしてきたことはたしかだと思われる。しかし、展示で欠落している、あるいは十分に説明されていないものは何か。空襲の被害については詳しく描かれ、その郷土の兵士の遺品や戦争中の「銃後」の人びとの苦しい生活に関わる日用品なども展示されるが、実は戦争がなぜ始まったのか、についての説明が十分ではないところの方が多い。